# “明るい絵”とは？
# ～絵に描かれた“光”の歴史～

■日時　令和６年３月９日（土）14 時から 15 時
■場所　まちなか図書館アートスペース
■豊橋市図書館「知の伝道師」　No.６．山田　幹
■内容　現代のように明るい照明がなかった時代、画家たちは形の無い“光”をどう捉え、描いたのか。中世から近代の西洋絵画を中心に日本美術からの視点も合わせながら、画家たちの描く“光”をたどった。

以前開催した「芸術の秋企画「良い絵」とは～オークションの視点～」が大好評だった山田さん。３月に豊橋市美術博物館リニューアルオープンということで、そちらに興味を持ってもらい、足を運んでもらうきっかけになればと考え、実施しました。

最初にバインダーと白い紙、そしてクレヨンが配られ「2 分間で皆さんが思う“明るい絵”を描いてください」という課題が出されました。おそらく戸惑う方もいるのでは…と思っていましたが、予想以上に皆さんすぐに取り組んだのが印象的です。あっという間に 2 分が経ち、山田さんから一つの正解が発表されると皆さん「はぁ…？」という反応。出された絵は Robert Ryman の「Series #17」。真っ白なキャンバスです。なぜこれが美術なのか？というのを突き詰めるのが「美学」に対し、**なぜこれが“明るい絵”なのか？を突き詰めるのが「美術史」**ということで、今回は美術史の観点から話を展開しました。この後は次のような流れでした。

- **西洋の中世～近代にかけての「描かれた“光”の歴史」**
- **“光”を描くために「消えたモノ」**
- **豊橋市美術博物館で見てほしい作品**

特に「描かれた“光”の歴史」については、時代ごとの時代背景の説明から、誰が絵を欲しがり、誰のために描かれたのか？という点から説明していたので非常にわかりやすかったです。よく聞く「写実主義」や「印象派」といった、時代ごとに描かれる作品が異なったことにも理由があるということを知れて、「美術って面白いな…！」と思ったのは私だけではないはず。しかも、そういった**作品たちに日本画が影響を及ぼしていた**りと、知れば知るほど面白い話が盛りだくさんでした。

参加いただいたみなさんからも「面白かった！」と感想をいただいた本企画。美術に興味のある方も、そうでない方も、**きっともっと美術に興味を持つきっかけになった**はずです。